

YNU

VOL. 192

YOKOHAMA National University
Public Relations Magazine

横浜国立大学 広報誌

横浜国大の「実践力」

新生・教育人間科学部

YNU Initiative for Global Arts & Sciences

横浜国大の「実践力」 新生・教育人間科学部

受け継がれ進化する YNUの学校教育DNA

Contents

03 横浜国大の「実践力」

受け継がれ進化する YNUの学校教育DNA

【特別対談】

1 日本の未来を託す子どもたちの生きる力を育むために

福田幸男 教育人間科学部 教授
三宅晶子 教育人間科学部 教授

•アートツール・キャラバンの活動
大泉義一 教育人間科学部 准教授

2 実践的・体験的な学習を通して幅広い視野を養う

堀井俊章 教育人間科学部 准教授
関戸英紀 教育人間科学部 教授

【INTERVIEW】
藤本弥生 教育人間科学部 教授

3 【INTERVIEW】
〈教育デザインセンターの活動〉
実践と研究をつなぎ、
情報を発信するハブとして

高木展郎 教育人間科学部 教授

•2011年度4月から改組
教育人間科学部 人間文化課程
白水紀子 教育人間科学部 教授

12 卒業生が語る、YNUの魅力
豊かな価値観をもった法律家を輩出するYNU

14 【研究室探訪】
杉本千佳 大学院工学研究院 准教授

15 Campus News

15 主なメディア掲載情報(2011年1月-9月)

〈今回の表紙〉
p7のコラムで紹介した大泉義一准教授の活動「アートツール・キャラバン」のために、大学院教育学研究科に在籍していた中国人留学生の賀挺(がてい)さんが開発した教育おもちゃ。ねじを組み合わせ、自由自在に好きな形をつくることができ、子どもたちの創造力を育てることを目的としている。

教育人間科学部の歩み

1874

小学校教員養成所設置

1876

横浜師範学校
(のちの神奈川師範学校)設置



1800年代

1900年代

学芸学部
(現・教育人間
科学部)の
前身

1949

神奈川師範学校・神奈川青年師範学校・横浜経済専門学校・横浜工業専門学校を母体として横浜国立大学が発足、学芸学部・経済学部・工学部を設置



設立時、
キャンパスは
清水ヶ丘・弘明
寺・鎌倉市に
ありました!

1979

工学部の常盤台キャンパス移転完了、大学院教育学研究科(修士課程)設置



さらに深い
研究の場
として設置
されました

1966

学芸学部を
教育学部に
改称



1996

大学院連合学校教育学研究科(博士課程後期)(東京学芸大学・埼玉大学・千葉大学・横浜国立大学による連合大学院)を設置

1997

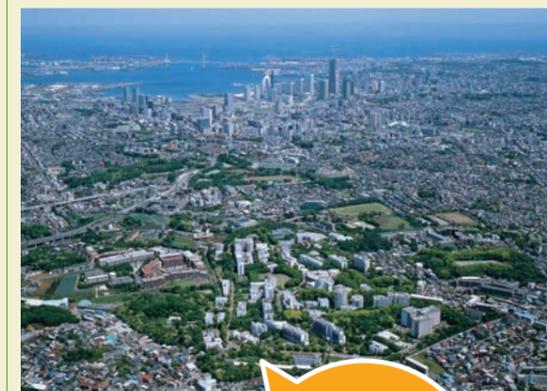
教育学部を
教育人間科学部
に改組

総合的
文化力を
上げるための
改組でした

2000年代

2011

教育人間科学部及び工学部を改組し、教育人間科学部人間文化課程と理工学部を設置、大学院教育学研究科を改組、大学院都市イノベーション研究院・都市イノベーション学府(博士課程前期・博士課程後期)を設置



教員養成に、
さらに
チカラを
入れます!

データで見る教育人間科学部

教育人間科学部
学生総数

1,956人



(男:939人 / 女:1,017人)

学校教育課程 975人(男:479人 / 女:496人)

人間文化課程 195人(男:76人 / 女:119人)

地球環境課程 157人(男:104人 / 女:53人)※
マルチメディア文化課程 315人(男:175人 / 女:140人)※
国際共生社会課程 314人(男:105人 / 女:209人)※

※2011年度4月期に、マルチメディア文化課程と国際共生社会課程は人間文化課程に、地球環境課程は理工学部へ改組・拡充されました。

教育人間科学部
教職員数

274人

(教授:76人 / 准教授:40人 / 講師:5人
附属学校教諭:124人 / 事務職員・技術職員:29人)

1974

清水ヶ丘・弘明寺・鎌倉市などに分散していたキャンパスを統合し、程ヶ谷カントリー倶楽部移転跡地に常盤台キャンパスを設置



2004

法改正により国立大学法人へ移行、大学院国際社会科学研究科に法曹実務専攻(法科大学院)を設置、経済学部経済法学科を廃止

大学の最大のミッションは「教育」することです。

学生は学ぶことにより「知」を集積し、発信し、社会に具体的な活動でフィードバックしなければなりません。こうしたYNUの教育についての在り方の源流は、1876年に設立された横浜師範学校(のちの神奈川師範学校)にあり、現在は大学全体の指針「実践性」として根付いています。

今回は、横浜師範学校以来の歴史と伝統を引き継ぎ、常に時代の要請に呼応している教育人間科学部の紹介、特に2011年春に、学部改編によりさらなる飛躍を期す取り組みについて伝えます。

since 1949

1 【特別対談】

日本の未来を託す子どもたちの生きる力を育むために

急速に変わる社会の中で、ベテラン教師でさえもが取り残される現代の教育現場。これまで以上に教育が重視されているいま、YNUが目指す教員養成とはなにか。東日本大震災を契機として見えてくる教育のあり方について、福田幸男教授と三宅晶子教授にお話を伺いました。

聞き手：広報・渉外室



福田幸男
教育人間科学部 教授

三宅晶子
教育人間科学部 教授

非常事態の中で見えた子どもたちの力

—— 近年の教育の現状や問題、その原因について教えてください。

三宅 教育学部から教育人間科学部へと変わる以前から、YNUでは教科教育の専門性を大変重視しています。小学校教師を志望する学生も、高校の第一種免許まで取得し、専門を確実に学んだ上でそれを小学校に応用するというスタンスです。

ただ、学生たちは、授業の予習復習やゼミの勉強に時間をかける余裕が少なく、豊富な専門の教科を受けているにもかかわらず、十分応用できていないのが残念です。以前学んだ内容を現在履修している部分に関連づけ、肉付けすることができるというのですが。

福田 心身の発達に関しては、子どもがよく分からない、思いがけない行動をとってコントロールできないなど、今までとは変わってきているという声をよく聞きます。不登校や暴力行為も多く、対応に苦慮しています。教科の指導にプラスして、心の問題をいかにして理解していくかが大きな課題です。

三宅 子どもたちが複雑に変化しているほど、教師には深く幅広い教養が求められます。柔軟に対応し、引き出せる能力が欠かせません。単なるノウハウで対応していると、子どもが良い反応をしても教師の方で気づくことができず、子どもはその教科に興味を失ってしまふ。その怖さとおもしろさを、大学でぜひ学んでもらいたいですね。

福田 教育現場は多忙で、すぐに役に立つ、明日からでも子どもたちに教えてくれる先生を求めがちですが、底の浅い教師になってしまう危うさをはらんでいます。大学では多くを学びますが、現場で子どもたちと向き合い、同僚や先輩の教師と授業を作っていく中で培わ



2008年、耐震補強を兼ねたイノベーション工事が完了した教育人間科学部講義棟7号館

れていく力もあるわけです。社会の目も厳しいですね。あの先生はダメだ、担任を替えてという声もあがります。教師を育てるという部分が、学校や保護者や地域から急速に失われています。

—— 変わる子どもたちに対応できる教師の柔軟性や専門性、教育に対する地域の理解も重要なのですか。ところで、東日本大震災は、教育にどんな影響を与えたのでしょうか。

福田 多くの被害を受け、厳しい学習環境に置かれながらも懸命に学んでいる子どもたちの姿に胸が痛みました。その一方で、貴重な気づきもありました。学校が避難場所になり、被災者に対する支援が行われ、子どもたちも今まで当たり前だった学校教育を受けるということに対して、非常に強い期待をかけてきました。先生方も大震災に直面して、地域の中でどんな役割を果たせるのか、身を持って体験し、学校は地域と独立しては生きていけない、地域も学校を切り離して活動できない、地域と学校は一体なのだを再認識する契機になったと思います。

三宅 避難場所の子どもたちが、自分たちでできることをみつけて、お年寄りの世話をしたり食事を配ったりしている姿も印象的でした。非常事態のなかで、本来持っている能力が

発揮されたのでしょうか。自ら問題を見つけ、それについて考え、試行錯誤しながら行動するのは、教育のもっとも根元的な力です。

福田 大震災のような場面では、マニュアルは通用しません。具体的な困難に立ち向かう力が問われます。マニュアル化された社会の中で、本当に大事なことは何かということを変更して気づかされました。

三宅 子どもたちが礼儀正しく、個人の判断で力を発揮できていたのは、今までの教育がきちんと行われていたあかしでもあります。それを21世紀に生かすためにどう応用していくかを考えることが大切ですね。

骨太な教師を養成するYNUの学び

—— 子どもたちは、非常事態に発揮できる力も秘めているのですか。教師を目指す学生たちはいかがですか。

福田 優等生ではありますが、いかにして創造的な活動に関わっていけるかという点が課題です。現場はもっと泥臭く、子どもと一緒に泣いたり笑ったりできる人が、まさに教師に向いているのですが、そのあたりがやや乖離

“自分の過ちや未熟さをごまかさずに子どもたちと向き合うことの厳しさ。辛くなったらいつでも大学に戻ってきてほしい。ある意味で、大学は桃源郷のようなところだと思う。(三宅)”



Sachio Fukuda
1949年生まれ。横浜国立大学教育学部卒業。東京教育大学大学院教育学研究科博士課程を単位取得満期退学。横浜国立大学教育学部助教授、同教授を経て、2004-08年教育人間科学部長を務める。2009年より神奈川県教育委員を兼務。専門は実験系心理学。

三宅 生涯学び続け成長していくことのできる教師を育てたいという思いから、教育人間科学部では本格的な卒論を課しています。3年次での演習で課題ゼミナールを経て1年半かけてテーマを追いかけます。諦めずにどこまで自分の頭で考え抜くことができるか。そのなかで、自分なりに教育のおもしろさや奥深さをつかむことができた学生は、現場に出ても粘り腰で向き合えるのです。ただ、教員採用試験で、その意味や価値が十分伝わっていないのではないかと感じる場合があります。

福田 採用する側は人物重視といっていますが、20分の面接で判断されるので、本来持っている良さを発揮できない学生もいます。世間的な評価は、教員に何%採用されたかが、教員養成学部のひとつの評価指標になるわけで、骨太の教師の養成を目指す我々にとって、もどかしい現実があります。

— 本格的な研究や論文のベースに、しっかりとした現場での学びがあるのですね。

三宅 5つの附属をはじめとする学校現場と、連絡を密にしながら、1年から4年までまったく別のタイプの実習を積み重ねています。1年次には、生徒目線で見ていた教師像や学校のイメージを、教える立場から捉え直し、教師になるために必要なことを自身で考えます。2年次は、中学高校免許用の専門教科に関わりながら学校現場を体験し、3年次に小学校4週間、中高は2週間という本格的な教育実習を行います。その期間は大学の授業の履修を認めず、教育実習に打ち込む環境を整えています。4年次は教職実践演習を行い、現場と関わりながら最後に本当に免許状を与えてよいか厳しくチェックします。

福田 学生たちは、カリキュラムに組み込まれた実習以外にも、学校の教室で先生の学習を手伝うAT(アシスタントティーチャー)などでも、積極的に現場での体験を積んでいます。ATの取り組みは、7、8年前から始まり、現場サイドも学生たちに期待をかけ、学生も生き生きと活動しています。

— 教科の専門性を磨き、教育現場での実習や体験もたっぷり、卒論にもじっくり時間をかけると、4年間は短いですね。

三宅 神奈川県には、4年次に教員採用試験に合格した学生が教職大学院に進むならば2年、大学院生の場合には1年待つという制度があります。採用試験の勉強から解放され、じっくり専門の勉強を深めて現場に出ることができます。

YNUの教育学研究科は、教職大学院のように、プロがスキルアップする場ではなく、現職の先生も白紙に戻って最初から見つめ直してもらいます。頭の柔らかい学生は、勉強すればするほど成長し、現職の先生は一度完成された殻をうち崩し、うぶな姿に戻ってどこまで伸びるかを追求します。

福田 今まで現場ですっと走り続けてきた先生方が、立ち止まって後ろを振り返ることができる場もあります。本当は、すべての現職の先生方が、サバティカル(研究休暇)を利用して、まったく違う体験をするチャンスがあるといのですが、現実には少ないですね。

よりよい教員養成のため 大学と現場が協力し合う

— 学部から進学した学生たちは、現職の先生方と一緒に学んでいるのでしょうか。

三宅 教育学研究科の1学年の定員は100名、指導教員もほぼ同数で、さまざまな先生や学生がいますが、まったく違和感はなく、それぞれがよいところを啓発し合っています。多様な人が集まって、それぞれの能力を発揮しながら新しい教育を研究しています。

福田 効率だけを考えれば、教員数を削減し、カリキュラムのスリム化を図ることになりがちです。しかし、そういう方向に流されることなく、多様な人がいることの良さが発揮される大学・大学院となっています。

三宅 YNUの教育デザインセンターも、教員養成に大きな役割を果たしています。前身は教育実践総合センターで、今まで行ってきた対社会的な教育に加えて、大学の教育実習や院生の教育インターンなども絡め、多様な現場と広くつなぐ組織として改組・改称されました。最新の情報を発信・キャッチして共有する場でもあり、自分の興味の持ち方で、いろんな形でその情報を利用し発表もできます。毎年2回行われる教育デザインフォーラム(教育実践フォーラムも含め、年3回行われる)は、学生や教員やOB、さらに教育に関心や問題意識を持っている地域の人々が集まって情報交換できる場として、いつも盛況です。これが根づいていけばさらに往還関係ができ、常に地域とともに教育を考えていく拠点になっていくのではと思います。

福田 社会が変化するなか、教員養成に現場サイドが協力し、採用や研修に対しても大学が支援をするという形で、相互乗り入れしながら、よりよい教員養成を模索しています。という教師を送り出すかという責任は、最終的に大学にあります。日本の未来を担う子

どもたちを育てるために、いかに優れた教師を世に送り出し貢献できるかが課題となります。教育学研究科は学生1人に教員1人、学部では2.5人に1人という、大変恵まれた体制で指導にあたっています。教育は人なり、教員養成は教育の原点なのです。

— では、最後に教師を目指す学生へのエールをお願いします。

三宅 知らないことをごまかすことは、誰にもありません。でも、自分が間違っていた、子どもの方が正しかったというときに、それを認めることができるかどうか。ごまかさずに生きることは、教師にとって何よりも大切です。自分を全部さらけ出せる場として、いつでも大学を利用してくれることを願っています。

福田 人間性をいかに磨けるか。魅力あふれる人間として、日々成長してくれることを望みます。30代、40代、50代と年齢を重ねるなかで、姿形は変わっても、その年代に相応しい魅力的な教師になって欲しい。子どもたちと関わる喜びを忘れず、生涯学び続けてほしいですね。



Akiko Miyake
1953年生まれ。東京女子大学文理学部卒業。早稲田大学大学院文化研究科博士課程後期修了。博士(文学)。横浜国立大学教育人間科学部助教授を経て、2002年より現職。専門は中世日本文学。古典教育。能楽研究者としても数々の賞を受賞している。

しています。教育の目標は、生きる力を育むことです。震災のような場面で、自ら考え行動して問題を解決するという部分では、物足りなさを感じます。

三宅 その点、現場に出るといのはよい経験ですね。ただし、現場への出方には注意が必要です。実習などの疑似体験を大学に持ち帰って自らの研究につなげられればよいのですが、疑似体験に夢中になって研究がおろそかになっては本末転倒です。

福田 過剰適応も問題です。現場の先生がいうことをそのまま受けとめるだけでは、実際の現場では対応できません。多様な経験をして自ら考えることを積み重ねないと、現場で成長できない人は、教師としての魅力を失ってしまいます。

“引き出しの多い魅力的な教師として、
生涯学び成長し続けること。
時代を切り開いていく若い世代に期待します。(福田)”

「避難所の子どもたちにアートな遊び場を『アートツールキャラバン』」 Art Tool Caravan

造形ワークショップで笑顔を取り戻すお手伝い

▶ www.7b.biglobe.ne.jp/~oizumi-labo

大泉義一 教育人間科学部 准教授

〈子ども—教育—アート〉に関心を寄せる学部生、院生、OB、地域人から構成されるAEゼミ(Art Education seminar)は、東日本大震災で被災された方々が大学の近くに避難されていることを知り、自分たちにできることは何かを真剣に考えました。

そして、編入学先の学校で不安を抱えながら過ごしているであろう避難所の子どもたちに対して、創造的で協働的な〈あそび場〉を提供するボランティア活動(『アートツール・キャラバン』)を実践することにしました。

実践では、参加した避難所の子どもたちと編入学先の子どもの間にも「心地よさ」という実感に根差した関わり合いが見られました。さらに、自信をもって笑顔で表現活動に取り組む子どもたちの姿からは、美術教育の実践がもつ可能性を感じることができました。

※「アートツール・キャラバン」は、その実績から「第5回キッズデザイン賞」を受賞しています。
▶ www.kidsdesign.jp



Yoshiichi Ooizumi
1968年生まれ。東京学芸大学教育学部卒業。明星大学大学院教育学研究科修了。東京都立中学校、東京学芸大学附属竹早小学校に勤務、その在職中に上記大学院を修了。その後、北海道教育大学准教授を経て、2006年より現職。専門は美術教育。



ゼミメンバーが開発・製作したアートツール。子どもは感覚を十分に働かせて遊ぶ



2 実践的・体験的な学習を通して 幅広い視野を養う

教育人間科学部は、学生が幅広い視野を持って専門的な知識を理解し、自分自身の問題意識を発展させ、一人一人の能力を高めるために、多彩なカリキュラムを展開しています。

教育臨床心理学

カウンセリング力を備えた学校教師の育成

堀井俊章 教育人間科学部 准教授

近年、学校現場では、「学校に行きたくない」「いじめられている」「死にたくなる」など、複雑で深刻な悩みを抱える子どもたちが増えています。学校の教師は、教科を指導する力だけでなく、子どもたち一人一人の生きる力を育て、人間的な成長を促進する「カウンセリング力」を身につけることが求められています。私の授業では、カウンセリングの基本理論について指導した上で、実践力を高められるように、ロールプレイ（役割演技）を中心とした体験学習を重視しています。ロールプレイとは、教師役と子ども役を設定して面接場面を演じ、その中で生じたコミュニケーションの課題を発見し解決してゆく実効性の高い学習法です。実際に行ってみるとすぐにわかることですが、学生たちは教師役を体験すると、「すぐに価値観を押しつけてしまう」「無責任な助言をしてしまう」「話題を自分の経験談にすり替えてしまう」など、さまざまな課題を自覚します。そのような気づきをもとに、どのような態度であれば子どもたちの力になれるのかを全員で議論し、カウンセリング力を身につけてゆきます。



カウンセリング体験学習の様子



Toshiaki Horii
1969年生まれ。上智大学文学部心理学科卒業。同大学院文学研究科心理学専攻博士後期課程修了(博士(心理学))。山形大学保健管理センター助教授を経て、2007年より現職。専門は学生相談。

特別支援教育

「理論」と「実践」を通して多面的な理解を深める

関戸英紀 教育人間科学部 教授



教育実践の様子



Hidenori Sekido
横浜国立大学大学院教育学研究科修了。横浜国立大学教育学部附属養護学校教諭を経て、2008年より現職。附属特別支援学校長。専門は、知的障害児・発達障害児の教育。

学校教育において、「理論」と「実践」は車の両輪のようなものであり、特別支援教育においては、とりわけその感を強く持ちます。

「理論」面では、evidence-basedな指導方法を学生に教示し、実際の事例を基にそれをシュミレーションできるようにしています。また、実際の子どもの様子や指導場面を理解できるようにDVD等を活用し、さらには外部講師として障害のある子どもの保護者、特別支援学校の教員、そして知的障害者施設の職員等に、それぞれの立場から特別支援教育や福祉における現状と課題について話題提供をしてもらい、特別支援教育を多面的に捉え、その認識を深めるための機会も設定しています。

「実践」面では、障害のある子どもに大学に来てもらい、学生一人一人が子どもとかわかっている中で、アセスメント→指導目標の設定→指導プログラムの作成→実際の指導→評価及びレポートの作成、と一連の流れを習得できるようにしています。また、授業者がかかわっている横浜市内の小学校へ学生をアシスタント・ティーチャーとして派遣し、授業者のスーパーバイズの下で、特別な教育的ニーズのある児童への支援を体験できるようにしています。

被服学

[Interview]

「きもの」文化を伝承し、快適な衣生活を科学する

薩本弥生 教育人間科学部 教授 聞き手：広報・渉外室

衣服の着心地を研究の軸としつつ、海外からも評価される日本の「きもの」文化を伝承・発信する薩本弥生教授。学生とともに取り組む実践的・体験的な学びや、そこから見えてくる衣生活の近未来について伺いました。

いかに着るか、衣生活の快適性を科学で究明

— 被服学教育で重視されているのはどんなことでしょうか？

被服学には、被服の製作だけではなく広く衣生活を営むための知識や技術も含まれています。流行に左右されるファッション性や個性表現がクローズアップされがちですが、衣服の機能にはファッション性を含む社会的機能のほか、体温調節補助、皮膚清潔保持、運動機能性、身体保護などの保健衛生的機能もあり、着衣の快適性に影響する被服素材の性質や被服のデザイン、さらに機能保持のための素材の適切な取り扱いを学び、保健衛生的機能と社会的機能のバランスがとれるようになることが重要です。また、日本の伝統文化である「きもの」は、海外からも高い評価を受けています。「きもの」に込められた美意識や知恵、技術を学び、伝承するのも大切ですね。

— 実際に、どのような教育・研究や活動をなさっているのでしょうか？

「きもの」の中でもカジュアルで取り組みやすい浴衣を題材に実習し、和服文化を被服の構成面から学んでいます。浴衣製作には型紙がいらないのですが、最近は被服製作が苦手な学生が増えています。中学での被服製作は選択になり、高校でも大学受験のために被服実習が減っているし、家庭で

も被服や小物を作って楽しむということが少ないからなのでしょうね。

半年かけて1着の浴衣を製作していますが、手元の細かな作業を理解しやすいように、電子白板を用いてe-learning用の図や写真を拡大表示してから実際に実演して見せています。また、授業時間中に目標まで終了しなかった学生のために、放課後や別の日に補習も行い、励みながら完成まで導いています。実習の最後には、自作の浴衣を着装して、図書館のメディアホールで公開型の浴衣のファッションショーを開催し、毎回盛況です。その後には、非公開で生地や縫製の苦労話、チャームポイントなどを発表し、学生たちがお互いに評価し合っています。

一方、卒業論文や修士論文の主な研究テーマは被服の快適性で、なかでも運動機能性の問題と温熱的な快適性の問題の2つを柱としています。学生たちは、「着衣(靴、オムツ、肌着等)の熱水分移動と快適感」、「高齢者の体温調節反応と被服の温熱的快適性」、「ブラジャー(授乳期、就寝用等)の着心地」など、個々に論文のテーマを見つけ、被服実習や着装モデル実験を積み重ねて、知識や洞察力を磨いています。

— 「きもの」文化の伝承は大切ですね。また、日本の夏は年々過酷になっていますし、被服で安全・快適に過ごす工夫は、ますます求められるのではないのでしょうか。

そうですね。衣生活を営むための知識と技術を、まずは各自の生活の場で実践できるよ

うになることです。さらに、被服素材を知って適切に手入れ・管理する能力や、障害者・高齢者・乳幼児・病人などに配慮したユニバーサルデザインの思想、さらに環境への負荷を低減するリサイクル・リユースの視点を、社会で生かしてほしいと願っています。

家庭科教育を担う教員をめざす学生もいるので、被服製作の技能や知識だけでなく、日本人として和服文化の魅力を伝えられるような、体験型教育プログラムの開発にも取り組んでいます。日本の子どもの心に「きもの」文化を尊重し継承・発展する芽を育てるプログラムや、外国の子どもの日本理解や文化交流の促進に貢献できるようなプログラムです。服飾の色、柄、形などは、地域や時代によって異なるものですが、「きもの」に込められた昔の人の生活の知恵や技術、美意識などが、国を越えて現代の衣生活やコミュニケーションに生かされるようになってほしいですね。

ゆかたを中心にきもの文化を理解するためのe-learningサイトを、プロジェクトの一環として作成したのでご覧ください。

▶ kimono-bunka.ynu.ac.jp



Yayoi Satsumoto
お茶の水女子大学家政学部被服学科卒業、同大学院家政学研究科被服学専攻修士課程修了、文化女子大学家政学研究科被服環境学専攻博士課程修了。横浜国立大学教育人間科学部助教授を経て2011年より現職。専門は被服環境学、被服衛生学、被服構成学。

被服実習におけるファッションショーの開催



浴衣製作風景



ナレーションも学生が役割分担



ファッションショー



過去のショーの様子の詳細は、薩本研究室のホームページにも掲載しています。

▶ ynu-satsumoto-labo.ynu.ac.jp

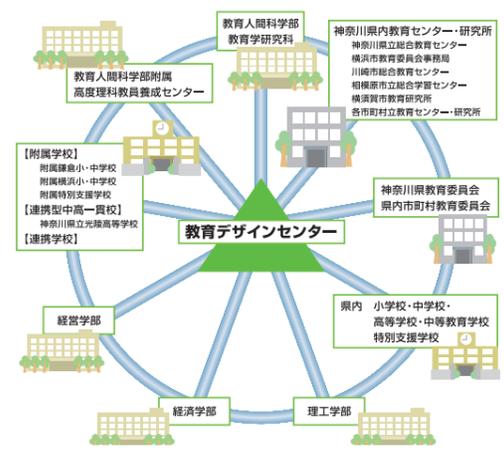
3 [Interview] 教育デザインセンターの活動

実践と研究をつなぎ、情報を発信するハブとして

文部科学省の中央教育審議会 教育課程部会委員などを務める一方、学校現場や教育委員会・県内教育センターとも連携する高木展郎先生に、教育デザインセンターがむすぶ教育について伺いました。

高木展郎
教育人間学部 教授
教育デザインセンター センター長

聞き手：広報・渉外室



教育デザインセンターの役割
教育デザインセンターは、教育現場と教育機関である大学の間をつなぐ役割を担っている

みんなで考える授業を 神奈川全県に

— 教育デザインセンターの取り組みについて教えてください。

理論的で実践的な研究と教育を行い、子どもの成長を巡る諸問題の解決に寄与して

きた教育実践総合センターを、2010年4月に改組・改称した組織です。従来の機能をより充実させ、教育実践、臨床教育、教科教育、学校教育全般に起きている多様な問題に対して、大学と学校、教育委員会・教育センター、地域をつなぐハブの役目を強化し、情報の発信源として支援や育成にあたっています。

県内の中心的な教育委員会・教育センターからは、指導主事や校長経験者を客員教授として招いて教育の課題を共有し、大学で授業を行っていただき、地域との連携も深めます。さらに、本学での教育研究の成果は、実践の場にフィードバックされます。

各学校には、本学の教員がアドバイザースタッフとして80回以上、また専任教員や研究員も200回以上、足を運んでいます(平成22年度実績)が、それを上回る熱心な要望が寄せられています。本学教員も、学校現場の実情や生徒・教師の意識などを的確に見据えた教員養成が可能になります。個別には魅力的な取り組みをしている学校が多くあり、学校

現場で忙殺されている先生方も、先進的な教育情報に触れて生かしたいと願っています。その橋渡し役となり、県全体の教育の質を上げることが重要なのです。

— どのような事例があるのでしょうか。

本年度から全面实施されている学習指導要領では、思考力・判断力・表現力を育むための各教科等における言語活動の充実が求められています。しかし、それは従来型の授業ではなかなか身につけません。教室で友達と関わり合いながら、もっとコミュニケーションすることが大切なのです。そこで、子ども同士で話し合い、わかったことを子どもが説明するような授業の開発が求められています。

ただ、その前提として「活動あって学びなし」に陥らないよう、指導計画をしっかり立てること。「あたたかな聴き方」と「やさしい話し方」ができる学級作りも欠かせません。話すことが苦手な子どもも、温かく受け入れられるという安心感があれば、次第に自分の

“子どもたちが実社会・実生活で生きていくときに、ほんとうに必要な学びとはなにか、を見通した教育が必要です。”

考えを話せるようになり、自信にもつながります。「ぼくはこう思ったけれど、みんなはどう思う?」「ぼくはこう思う、なぜならこういうことがあったからです」と説明できる力は、小学校1年生でも持っているのです。

そうして、「わかる人」と手を挙げさせるのではなく、「わからないところある?」と聞いて、わからない子を置き去りにしない完全習得学習を積み重ねます。子どもたちはわからないから学校に来る、それをみんなで考えるのが学校なのですから。

県下には、こうした言語活動が各教科のカリキュラムにしっかりと位置づけられて、1000人単位でも不登校がほとんどいないという学校がいくつかあります。私たちは学校に出向き、先進的な取り組みを紹介しながら、先生方と一緒に授業作りをしています。

— 問われる学力や求められる教育は、変わってきているのですね。

知識の習得に偏重した受験学力は、これからの世界では通用しません。教育は、今の小学生や中学生が実社会・実生活で生きていくときに本当に必要な学びは何か、というこ

とを見通して行わなければなりません。そのためにも、研究と実践は双方向、最前線である学校は大学と対等の立場で実践し、問題点を研究や教員養成の場に投げかける。その往還関係がないと教育研究は成り立たないのです。

— 学内でも都市型総合大学の教員養成システムを構築するために、さまざまな連携をされていますね。

横浜スタンダード(教員養成段階における資質・能力の観点別評価基準)小学校版の再検証と中学校版の策定を行っています。教育人間科学部と教育学研究科の教員養成カリキュラムの連続性や、附属高度理科教員養成センターや理工学部と連携した理科系教員養成プログラムの充実、経済学部・経営学部の教員免許取得にも関わり、それぞれの教育実習先である小中高等学校とをむすぶパイプ役を担っています。

高度な専門性と実践的な指導力を備えた人材を輩出する教員養成システム構築のため、今後ますます求められるハブとして、また情報発信の拠点として充実させたいですね。



積極的に小学校でアドバイスを行う高木先生。現場の先生方もとても熱心に取り組んでいる

Nobuo Takagi

1950年生まれ。横浜国立大学教育学部卒業。兵庫教育大学 学校教育研究科修了。福井大学助教授・静岡大学教授を経て、2001年より現職。授業の質的研究をテーマとしている。



2011年度4月から改組 教育人間科学部/人間文化課程

メディア文化+国際共生社会から人間文化課程へ スタジオ式教育を取り入れた未来派カリキュラムの核

白水紀子 大学院 都市イノベーション研究院 / 教育人間科学部 教授
教育人間科学部 人間文化課程長



文化リテラシー基礎論の講義



Noriko Shirouzu
1953年生まれ。東京大学大学院博士課程修了後、1986年横浜国立大学教育人間科学部助教授、教授を経て2011年より現職。この間に北京日本学術センター主任教授、国立台湾大学客員教授を歴任。専門は中国文学。

教育人間科学部人間文化課程は、それまでのマルチメディア文化課程の芸術系と人文社会系の国際共生社会課程を合わせた、今年からスタートした新しい課程です。「隣接諸科学」との協働によって、新たな問題提起能力や発信能力を養成することをめざしています。

人間文化課程には「芸術文化コース」と「社会文化コース」の2つのコースがあります。「芸術文化コース」は、サブカルチャーを含めた文芸、映像、音響、現代アートの芸術諸分野に関して、その歴史と現在についての知識と理解を深め、実践へと導いていくコースです。「社会文化コース」は、国際社会における新たな交流と協力へのノウハウを身に付けるために、「多文化共生」「生活地域コミュニケーション」「社会的イノベーション」「共

感的連帯」「記憶の共有」などの知識・能力の養成を目指すコースです。

人間文化課程のカリキュラムの特色としてスタジオ科目があります。都市社会の問題や文化創造に実践的に関わっていく、そのトレーニングを目的として、1年秋学期から3年秋学期まで開講します。7月に今年の秋学期から始まる「スタジオ入門」へのクラス分けをしたばかりで、3年からのゼミ分属へつながる第一歩を踏み出したところです。

教員スタッフは27名、第1期生となる学生は留学生も含め195名が人間文化課程で学んでいます。卒業後の進学先としては、指導教員の所属先と関連して、これも今年から新たにスタートした都市イノベーション学府のほか、環境情報学府、教育学研究科などがあります。

豊かな価値観をもった法律家を輩出するYNU

学生時代の学びの意味や真価は、実務に就いてから実感するもの。
そこで、YNU国際社会科学部から巣立った若き弁護士と弁理士を招き、YNUの特色や仕事への思い、将来の展望やYNUへの要望を伺いました。

高見良貴さん（弁理士／大学院国際社会科学部 国際関係法専攻（博士課程前期）2004年修了）

藤田香織さん（弁護士／大学院国際社会科学部 法曹実務専攻 2006年修了）

聞き手：原田一明 大学院国際社会科学部 教授

多様な学びの中で磨かれる 生きた法律実務家像

— 進学先にYNUの国際社会科学部を選択した経緯を教えてください。

藤田 私は2004年に上智大学の法学部を卒業しました。ちょうどLS（ロースクール）一期だったので、LSがどんなものか、司法試験の合格率がどうなるかもわからないまま受験して8校に合格しました。YNUは、地元の横浜弁護士会がとても熱心にLS作りに参加されていて、他校とは熱の入りようが全く違うと感じました。人間的でとても親身に考えて下さるので、片道2時間半と遠かったのですが、YNUを選びました。

高見 私は理系志望でしたが、大学受験の時に文系を選ばざるを得なくなり、YNUの経済学部経済法学科に入学しました。将来の道を模索する中で、弁理士の資格を知り、知的財産の授業にも興味を持ちました。大学3年次に特許事務所アルバイトをしてみて、やはり法

律の知識が不可欠な資格だとわかり、YNUのIR（国際社会科学部国際関係法専攻）に進みました。大学院2年目の2003年に弁理士の資格を取り、修了と同時にアルバイト時代からお世話になっている西浦特許事務所へ、弁理士として活動を始めました。

— 法律に関わる幅広い人材が育っているのですね。実際にYNUで学んでいた頃の印象はいかがですか。

藤田 他のLSでは、実務家教員は実務家教員だけで授業を持ちますが、YNUは実務家教員と学者の教員が2人1組でタッグを組んで教えてくれるので、学者の先生の深い知識と、実務に精通した事例や事情を同時に学べるのが非常に魅力的でした。

高見 私の進学はLSができる前でしたが、実務家と研究者の先生とはまったく考え方が違うことが興味深く、バランスの取れた考え方が身につきました。

藤田 LSの既修者コース11名の同級生のう

ち、大学卒業後すぐに入学したのは私だけで、何年か司法試験の勉強をしている人や、国税庁職員、元OL、塾講師などいろいろなバックグラウンドを持つ人がいました。知財や国際交流関係の授業などは一緒に受けていたIRの学生とも交流がありました。他の大学ではLSはLSだけ、司法試験の勉強に特化しているところも多いのですが、YNUは比較的幅が広くて、いろんな人と話せたのが大きいです。

高見 IRにも税関、農水省、韓国の特許庁の審判官、中国の弁護士など、多様な人がいましたね。輸出入の際に特許や商標を侵害していないかということも非常に重要で、税関はそれを見張る役割もあります。学生の頃に漠然と聞いていた話が実務の中で理解でき、税関の人たちの動きが見えます。また、韓国の特許法は日本のものと非常によく似ていて、法概念が近いということも聞いて役立っています。国際的な幅広い視野が持てたと思います。

— 現在の仕事についてもお聞かせください。

高見 西浦特許事務所は5人の弁理士がいる中規模の事務所、特許の仕事では所長と共に、タッグを組んでひとつの発明を把握していきます。どの部分に発明やアイデアが存在しているかは、実は発明した本人もよくわかっていないことがあり、それをいかに導き出していか、ヒアリングすることが命です。出願後に特許庁で審査があり、拒絶理由が来ることもあります。そのときは反論をしますが、出願した書類以上のこと、新しいことを追加することは認められていないので、最初にいかに完成したものを作れるかが重要です。専門知識のある方から聞き出すのは、技術的に理解できても、どこが発明なのか非常にわかりにくく、発明を把握する能力とヒアリング能力をもっともっと磨かなければと思っています。



LS（ロースクール）授業の一環である模擬法廷で行われた被告人尋問（写真上）に参加する高見さんと藤田さん



— 弁護士と協同行う訴訟もありますか。

高見 商標を侵害された側として訴訟に関わったことがあります。補佐人という形で証拠作りや文書のサポートを行いました。弁理士は知財の専門家として任せられ、それを道具として用いて戦うのが弁護士。やり方も考え方も違うのが面白かったです。

藤田 私は、YNUの元実務家教員の杉原・須々木法律事務所に就職しました。企業法務や銀行・保険会社等の代理人、刑事事件では日本で最初の裁判員裁判で死刑判決が下された事件の代理人も担当しました。少年事件や子どもの虐待、子どもをどうやって保護するか、母親の元に戻せるかどうかなど児童相談所への法的なアドバイス、裁判所に対して一定の申し立てをし、子どもを母親から離す手続きの代理なども行っています。横浜弁護士会の子どもの権利委員会にも入っています。

目の前にいる人を助ける仕事は、相手の顔が見えていて、とてもやりがいがあります。たとえば、ある少年は、最初は眉毛もなく金髪で「なんだよ、てめえ」と言っていました。裁判もその子の生活の建て直しも一緒にして、いまでは「就職したよ」とか「彼女とよりが戻った」など連絡をくれます。

— 立派にやっていることを伝えたいのですね。

藤田 はい、その子は正面から自分と向き合ってもらった経験や、自分のことだけを心配してもらった経験がないので、ものすごい悪態をつけて私を追い出したり、私を試すようなこともしました。それでも私が離れていかないとわかるとすごく安心して、その後の人間関係も安定してきました。このような関わり方は、弁護士のような自由な仕事でないでできません。その子と一緒に私自身も成長させてもらっています。

— 藤田さんは今年の秋からLSで実務少年法を担当します。修了生が講義を担当して後輩たちを指導する第1号です。

藤田 弁護士会は、自分たちが教えた生徒だから気にかけてくれて、故郷に錦を飾らせてやろうと（笑）。私自身、横浜弁護士会の実務少年法の先生が、とても楽しそうに仕事の話されるのを聞き、仕事にあこがれて、その先生と一緒に子どもの事件を担当したこともあります。私も後輩たちのちょっと先輩として、先のモチベーションを作ることができたらと思います。

— 今後の目標やYNUに望むことをお聞かせください。

高見 弁理士は分野を特化してやっている人が多いのですが、中小企業さんからはいろいろな分野をまとめて依頼されるので、オールマイティにこなせる弁理士を目指しています。そのために、東京理科大学の夜間でも学びました。社会人編入の形で2年生に編入して3年間、今年の3月で卒業しました。

大学院でさらに学びたいと考える社会人は多いのですが、自由な時間が少ないので、アクセスの良さが重要です。YNUにサテライトなどあれば通いやすくなるでしょう。また、学びたいことが明確で、この分野と特化しているケースが多いので、その受け皿として柔軟な体制を整えていただけたらうれしいです。

藤田 やはり弁護士としてしっかり仕事ができるようにと思います。いつかYNUの博士課程後期に戻って勉強ができたらと思っています。

— YNUには、お2人のように向学心の高い人材がたくさんいます。今まではLSもIRも横浜弁護士会にいろいろな支援をいただいているのですが、今後は高見さんのような方も含めてYNUで育った人材を還元していきたいと思っています。



懐かしそうに語る高見さん（中央）と藤田さん（右）を見守る原田先生

国際社会科学部は、弁護士や弁理士をはじめとした実務家・研究者の養成に力を入れています。

▶ www.igss.ynu.ac.jp

国際社会科学部は、内外のニーズに対応した前期・後期の一貫教育を前提に、一部英語による研究・教育も実施しています。また、国際的な諸問題に対応する能力を育成すべく、社会諸科学からのアプローチを可能にした柔軟な履修体制の下で、留学生や社会人が研究に専念しています。このように本研究科は、LS（ロースクール）とIR（国際社会科学部国際関係法専攻）を両輪として、弁護士や弁理士などの実践的な高度専門実務家から、国際社会で活躍できる実務家および研究者まで、幅広く人材を養成するという点に特色があります。



Kazuaki Harada
1958年生まれ。東京都立大学大学院修了、博士（法学）。東京都立大学教授を経て、2005年より横浜国立大学大学院国際社会科学部教授、2011年より法曹実務専攻長。主な研究分野は憲法学・統治構造の研究。

知に基づく快適な人間環境づくりを目指して

人と人を取り巻く環境をセンシングし、通信・ネットワーク技術、データ解析技術を活用して時々刻々と変化する個別の人間や環境の状態を認識し、その知を役立てたい。
健康・医療・環境をキーワードに、人と環境に優しい社会基盤づくりを目指しています。

聞き手／蜂須賀元晃（工学部電子情報工学科 4年）

人や環境を知り、活かすための技術

— 杉本先生が取り組んでいらっしゃる研究分野についてご紹介ください。

人間や人工物、環境が発信する情報を計測し、解析・評価、さらには予測して、最適に制御する技術を研究しています。応用分野は、人・車・環境など対象によって多岐にわたります。

たとえば、蜂須賀君が取り組んでいるITS（高度交通システム）の分野では、人と車と道路を情報ネットワークで結んで、快適な交通環境を実現することを目指していますが、ダイナミックな交通環境に適した通信方式を用いてシステムを構築することが必要です。NLOS（見通しの悪い環境）で歩車間通信・車車間通信を行うための最適な通信ネットワーク手法など、情報通信工学からのアプローチにより、渋滞緩和、交通事故予防、道路環境の安全性向上に役立つ技術が研究され、世界的にも研究が盛んな分野です。

また、ウェアラブルセンシングの分野では、非侵襲で人への負荷が少ない小型センサの開発、バイタルサインや行動データに基づく生体の状態モデルや行動モデルの解析を行い、予防医療や生活支援に生かす研究をしています。基盤技術の研究・開発とともに、アプリケーションに応じて技術を柔軟に適用できるようにすることも不可欠です。

震災の経験からもわかるように、目に見えないものの存在や生体への影響を定量的なデータとして常時計測し、情報を正確に把握できるようにすることの価値は高いと思います。

— 先生がYNUで特に力を注いでいるのは、どのような領域でしょうか。

大学院工学研究院の河野隆二先生が拠点リーダーをされているグローバルCOEプログラム「情報通信による医工融合イノベーション創生」の中で進められている、医療ICT（医療



センシングと通信について、助言を受ける蜂須賀さん

情報通信技術)、生体システム工学の研究です。もともと大学では、人間を対象とする医療や人間工学に関わる研究をしたいと考えていました。

近年、医工連携の取り組みが進んでいますが、工学部の研究者と臨床医学の医師では視点が異なることが多々あります。YNUでは、GCOEプログラムの中で横浜市大医学部との医工連携を積極的に進めていますので、研究としても比較的取り組みやすい環境があります。医療現場の実環境で計測し、データを取得することができますので、環境に適した技術を研究するのに役立ちます。

— 具体的にはどのような研究をされているのでしょうか。

一例ですが、糖尿病患者の血糖値をセンシングし、インシュリン投与を自動制御して血糖値管理できるようにするための研究や、深部体温や衣服内気候等を環境情報とともに計測して生体状態を評価し、熱中症を予防するための研究をしています。また、医療機器の無

杉本千佳
Chika Sugimoto

大学院工学研究院 准教授

東京大学工学部計数工学科卒業。同大学院新領域創成科学研究科博士課程修了。2010年より本学に着任。医療ICT、生体計測工学の研究を主にやっている。



線通信制御を高信頼化するための研究も行っています。

— 研究室の雰囲気はいかがですか。学生たちへのメッセージをお願いします。

杉本研は立ち上げて2年目のため少人数構成ということもあり、学生同士仲良く、みんな若くて元気です。研究面では、真面目に取り組んでいると思います。河野研と合同で輪講を行い、研究室を連携して運営していますので、質問できる先輩もたくさんおり、大所帯研究室の雰囲気もあります。

学生たちには、まずは自分の専門領域を極めて自信をつけて欲しいと思います。その上で、広い世界で経験を積んで幅広い知識を身につけ、多面的な考え方ができるようになってほしいですね。そうした経験と知識が、研究にも豊かな示唆を与えてくれます。

— 本日はありがとうございました。

東日本大震災を受けて

「東日本大震災緊急報告会」を開催



当日は鈴木学長(写真右)の挨拶を皮切りに、パネル討論では活発な意見交換を行った

2011年6月1日、本学と読売新聞社主催、「〈東日本大震災〉緊急報告会 横浜国立大学は挑んでいます 実態解明、復旧・復興へ向けて」を横浜ビジネスパーク大会議室で開催しました。

本報告会は、本学が行政・報道機関と連携し、去る3月11日に発生した東日本大震災について、どのように現状を把握し、対応・支援・解決に向けて活動しているかを広く社会に発信することを目的としており、鈴木学長より開会の挨拶が行われ、古尾谷光男神奈川県副知事からは、このた

びの震災における神奈川県への対応等について講演いただきました。

さらに、海洋研究開発機構上席研究員の小平秀一氏、読売新聞記者の小林直貴氏及び本学研究者によるパネル討論を2部構成(第1部「現状(東北のその時、今は…)」、第2部「復興(復旧・復興へ向けて)」)で行い、活発な意見を交わしました。

報告会への参加者は200名を超え、盛況のうちに終了しました。

主なメディア掲載情報 (2011年1月-9月) MEDIA INFORMATION

新聞 NEWSPAPER

● 孤立しない住まいとは—大学院工学研究院 山本理顕教授が「地域社会圏」と名付け、若い建築家らと始めたプロジェクトについて語る (1/9 朝日新聞)

● 教育人間科学部 松宮正彦准教授は、廃棄物と使用エネルギーを削減できるレアアース(希土類)回収技術を確認した (1/31 日刊工業新聞)

● 留学先での学生の被災に際し、横浜国大では民間の危機管理会社を通じて連絡が取れる体制になっていることと、大学独自の取り組みとして「横浜国立大学危機管理基本マニュアル」を作成していることを紹介 (3/7 朝日新聞)

● 横浜国大地域連携推進室が主催するフォーラム「都市における地域連携・社会貢献を考える」が30日、横浜ビジネスパークで開催される (3/25 神奈川新聞)

● 東日本大震災発生時、県内の湖で起きた“津波”のような現象について、大学院都市イノベーション研究院 佐々木淳教授が解説 (4/27 産経新聞)

● 横浜国大建築学科の教員や大学院生が、震災ボランティアとして、4/27～5/6に宮城や福島被災地で活動。今後の被災地支援に生かすために建物の被害状況や耐震性を調査 (4/29 日本経済新聞)

● 横浜国大ヨット部は、東日本大震災の津波で全てのヨットを失った東北大ヨット部へ、ヨット2艇を寄贈するため28日発送作業を行った (5/29 神奈川新聞)

● 横浜市、川崎市などの耐震判定委員会委員

を務める大学院都市イノベーション研究院 田才晃教授は東日本大震災の現地調査結果を踏まえ津波対策として鉄骨・木造の建て分けを提言 (6/23 日本経済新聞)

● 鈴木邦雄学長が緑豊かなキャンパスの歴史と、教育方針として継承されている「名教自然」への解釈について自身の「自然こそ人格形成の基盤」との主張を交えて語る (6/25 読売新聞)

● 「フロントランナー」のコーナーで、昨年建築界のノーベル賞と称される「プリツカー賞」を受けた建築家・都市イノベーション研究院 西沢立衛教授の創造活動の背景やその姿勢を紹介 (7/9 朝日新聞)

● 「節電熱中症」の危険性が指摘される今夏、教育人間科学部 田中英登教授は通気の良い服装を推奨し、28度の温度設定で水分補給をすれば熱中症の危険性はほとんどないと話す (7/16 朝日新聞)

● 「改革に挑む～大学 この人に聞く～」のコーナーで鈴木邦雄学長のインタビューが掲載。今春の組織再編や地元との連携について語る (8/5 日刊工業新聞)

● 横浜国大と読売新聞横浜支局は共催で10月から全6回の市民講座「社会と数学—役立つ数学」を開く。数学を通して人々の社会的なつながりについて知り数学的能力を発見してもらうのが狙い (8/30 読売新聞)

テレビ・ラジオ TV・RADIO

● 「@キャンパス」(NHK BS1 1/27) …大学生が企画・制作を行う国際情報番組で本学の学生が制作を担当。本学の「バイク女子」の実態などを紹介した/ビ

ジネスサークル”NoN(ノン)、学生広報サポーター ● 「おはようニッポン」(NHK 3/4) …入試問題投稿事件に関連し、大学側の対策について中継でコメント/広報・渉外室 大澤俊正

● 「スーパーJチャンネル」(テレビ朝日 3/22) …東日本大震災での交通システムの問題点について、コメント/大学院工学研究院 中村文彦教授

● 「ワールド・ビジネスサテライト」(テレビ東京 4/8) …特集「ミクロ技術・通信が変える医療」の中で、先生方の研究が紹介された/大学院工学研究院 河野隆二教授、丸尾昭二准教授

● 「夢の扉+」(TBS 5/15) …熱い志と深いビジョンを持って社会を切り拓く人として紹介された/大学院工学研究院 山本理顕元教授

● 「FMサウンド★クルーズ」(NHKラジオ 5/18-20) …大学と商店街をつなぐプロジェクトの代表として出演/和田ペムプロジェクト

● 「ウェークアップ! ぶらす」(日本テレビ 7/2) …今夏の電力需給に関するQ&Aのコーナーに出演/大学院工学研究院 大山力教授

● 「世界一受けたい授業」(日本テレビ 7/16) …「電気を使わず涼しく快適! 酷暑を乗り切る正しい夏ファッション」と題して、授業を実演/教育人間科学部 薩本弥生教授

● 「インシュタインの眼」(NHK BSプレミアムテレビ 8/27) …本学の人工気象室で湿度と熱中症の関係について実験を実施し、田中先生が実験の結果について解説/教育人間科学部 田中英登教授

● 「コスミックフロント」(ホーキング博士の宇宙②地球外生命体) (NHK BSプレミアムテレビ 9/27) …地球外生命体が存在する科学的な可能性について解説/大学院工学研究院 小林憲正教授

公開情報についてのお知らせ

▶ www.ynu.ac.jp/about/information/salary/pdf/yakusyoku_kyuuohH22.pdf

平成22年度の国立大学法人横浜国立大学の役員員の報酬・給与等については上記URLからご確認いただけます。問い合わせ先/横浜国立大学 総務部人事・労務課給与認定係 ☎045-339-3023

訂正とお詫び

YNU 191号にて、17ページ・研究室探訪の小林正佳教授のプロフィール部分に間違いがありました。正しくは「文学修士、言語学修士」です。



【YNUお宝探訪②】

ベヒシュタイン

世界三大ピアノメーカーの一つで「ピアノのストラディバリウス」と呼ばれるほどの名器です。横浜高等工業学校初代校長の鈴木達治先生が学生のために購入しました。当時は大変貴重なもので本学の他に東京音楽学校（現：東京藝術大学音楽学部）、首相官邸などにも納入されています。戦後まもなく駐留米軍に接収をうけましたが、学校側の強い働きかけの結果、返還承諾を取り付け、現在も横浜国立大学教育文化ホールの中で、素敵な音色を奏でています。

横浜国立大学広報誌 第192号

2011年10月20日発行

編集・発行 国立大学法人横浜国立大学広報委員会
〒240-8501 横浜市保土ヶ谷区常盤台 79 番 1 号

YNU 編集委員長 山田 均（副学長／大学院都市イノベーション研究院 教授）

編集・発行 横浜国立大学 総務部 広報・渉外室
TEL. 045-339-3016 FAX. 045-339-3179 URL. www.ynu.ac.jp

アートディレクション 神里 僚子（経営学部卒業生）／株式会社リポグラム

横浜国立大学ホームページURL ▶ www.ynu.ac.jp

横浜国立大学で行われる各イベントに関する情報は、上記アドレスからご覧になることができます。